

1946



創立当時の愛知大学本館

戦後の困難のなか、新大学「愛知大学」を設立 「無」のうえに「有」を築き上げた創成期

愛知大学は、1946年(昭和21)年、東亜同文書院大学最後の学長本間喜一や、小岩井浄、神谷龍男、木田弥三旺をはじめとした東亜同文書院大学(以下、書院)関係者の尽力と、横田忍豊橋市長の支援により、豊橋市の旧陸軍士官学校(旧陸軍第15師団)跡地に設立した。これには以下のような背景がある。1946年に上海から帰還した本間喜一が、財団法人東亜同文会(書院の経営団体)の会長代理一宮房次郎を訪ね、「東亜同文書院大学に代わるべき新大学の設立を東亜同文会として考慮していただきたい」と申し入れを行った。数日後、「採用しないことに決定した」との回答を受け取った本間は、「教職員有志のものが相集って設立しても差支えないか」と問い、一宮氏は「有志で設立されるについては何等差支えない。我々も或程度^{わぶさか}の援助を与えるに吝ではない」と答えたことによる。本間喜一、小岩井浄の両氏は、1946年5月30日に東京九段下の若宮旅館にて書院の教職員を招集。神谷龍男、木田弥三旺等13名が参加し、新大学設立と9月開校目標が決議された。大学設置場所は、久留米市・別府市・豊橋市・半田市・鎌倉市などが候補地となり、「大学将来の発展」を見据えて慎重に検討された。中部日本には法文系大学はなく、構想如何によっては全国的大学として優秀な学生を集めることができる、との見地に立ち、さらに軍関係の建物の借入が有望であること、甘藷の大量生産地であり2~3千名に及ぶ学生への食糧に不安がないことから、豊橋市を最適地として決定。大学名は「智を愛するものが集う」との意味を含んだ「愛知大学」に決まった。愛知大学は1946年11月15日、昭和天皇によるご押印のうえ、吉田茂内閣総理大臣から旧制大学として許可された。日本で第49番目に開学した愛知大学は、2019年、創立73年を数える。



林 毅陸 (1872~1950年)
慶應義塾塾長・慶應義塾大学
総長兼務の後、東亜同文会理
事。本間の熱心な説得を受け
て愛知大学初代学長に就任。



本間 喜一 (1891~1987年)
東亜同文書院大学最後の学
長。戦後は愛知大学第2代・
第4代学長、最高裁判所初
代事務総長を歴任。



小岩井 浄 (1897~1959年)
弁護士として社会運動を先
導。東亜同文書院大学教授。
愛知大学創学に尽力、法経学
部長などを経て第3代学長。

73年前、戦後の苦難時に刻まれた建学の精神は、現代の「今」、響き輝く

1946年開学時、建学の精神に「世界文化と平和への貢献」「国際的教養と視野をもった人材の育成」「地域社会への貢献」が定められた。そこには、戦争への反省と民主主義への希求、そして、国際社会と地域社会への発展に寄与するグローバルな資質を備えた人材を育てる、決意が込められている。

1901



東亜同文書院虹橋路校舎

118年前、中国・上海で始動した グローバル教育「知を愛し、世界へ。」

日本と中国を繋ぐ、東亜同文会が設立したビジネススクール「東亜同文書院」

愛知大学のルーツ校は、1901(明治34)年に中国・上海に誕生した「東亜同文書院」(1939(昭和14)年に大学へ昇格)。当時の東アジアは欧米列強の圧力が清国へ一層強まる中、日本も危機感を抱いていた。そのような中、弱体化しつつある清国と提携し、東アジアの安定を図ろうとする動きが、それまでの欧米指向中心であった日本の中に新たに芽生えた。それをまず具体化したのが、荒尾精による日清間の貿易をめざし、貿易実務者を養成しようと1890(明治23)年に上海に開学した日清貿易研究所で、卒業生約90名を輩出した。そのあと日清戦争が始まり、日本が勝利すると、清国への賠償金請求が唱えられるなか、荒尾は反対表明を繰り返し、日清貿易発展のために検討を続けた。一方、近衛家の筆頭となった近衛篤磨は独学のうえ、ヨーロッパ留学を経験。2度目のヨーロッパ訪問時にヨーロッパ列強のアジア戦略情報を知ると、東アジア安定化のためには、日清間での教育、文化交流が必要だと痛感する。そこで1900(明治33)年、近衛は清国の近代化改革をめざす実力者である劉坤一と張之洞の両総督との協議により、南京に「南京同文書院」を開学、日本人入学生24名は、清語・英語・商業・政治などを学び始めた。「南京同文書院」は設立直後、北清事変によって南京の危機が高まったため、1901(明治34)年、上海高昌廟にキャンパスを設置し、「東亜同文書院」に改名した。書院の経営は財団法人東亜同文会が担い、初代院長には根津一が就任して、荒尾精が意図した日清間の本格的な貿易実務者を養成するビジネススクールとしての歩みを始めた。近衛は発展を図るべく新たな全国府県費(給付奨学金)制度による学生募集を行った結果、「知を愛し上海へ」留学した卒業生は5,000名に上った。カリキュラムは、清語・英語の語学と貿易・商業科目に、中国国内を主なフィールドワーク先とする「大調査旅行」を配置し、延べ700コースに及ぶ調査が行われた。東亜同文書院大学は、1945年(昭和20)年の敗戦後、財団法人東亜同文会の解散とともに幕を閉じた。なお、最後の学長本間喜一の指示により、中国からの帰還時に、教職員・学生が『学籍簿』『成績簿』をリュックサック等に大切にしまい日本に持ち帰った。5,000名に及ぶすべての学籍簿、成績簿が、今も愛知大学に保管されている。



荒尾 精(1859~1896年)
1890年、東亜同文書院の前身にあたる日清貿易研究所を上海に開設し、東亜同文書院を構想した。



近衛 篤磨(1863~1904年)
近衛文磨の実父。第3代貴族院議長、東亜同文会会長。当初、南京同文書院を設立。のち、上海に東亜同文書院設立。



根津 一(1860~1927年)
日清貿易研究所の運営に携わり、近衛篤磨に協力して東亜同文書院設立に尽力。初代・第3代院長。